

説教 『今日、キリストと、十字架で』 山本 護 牧師  
聖書 イザヤ書 53：5／ルカによる福音書 23：39～43

弟子は霧散し、女たちは遠くから十字架を見ていた(ルカ 23:49)。近くにいたのは処刑執行人か。いや、もっと近くにいる者が。今日は傍らの二人の位置から、消え入りそうなイエスの声を聞き取りたい。

両脇で十字架につけられた者は(23:33)、帝国支配に抗う政治犯であった(NO.851 参照)。真ん中の十字架にイエスをつけた理由は(23:33)、総督ピラトが法を遵奉しているという体裁のためであろう。つまり元来イエスは無罪だが(23:4,14,22)、ピラトは民衆蜂起を警戒し、保身も考え、誇り高きローマ法に目をつむって民の求めにおもねたこと(23:23~24)の隠蔽。イエスの処刑は、帝国側にすれば数多の政治犯処理に過ぎないが、ユダヤ側にしてみれば聖俗を脅かす(23:10~11)運動の封じ込めであった。

両脇の一人は、「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ(23:39)」とイエスを罵る。これは人々の嘲りの写しであり(23:35~37)、「メシア」称号は断罪の口実に使われた(23:2)。もう一人は同輩をたしなめ、「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない(23:41)」と応じた。ここに描かれているのは、二人の人物というより、「一人の人間の異なる側面」ではないのか。すなわち、怒りと諦めが拮抗する私自身ではないか。

十字架につけられた二人の政治犯は、一方で苦しみ絶望し、悪態をつくよりしかたがない状態の私。しかしもう一方で、「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください(23:42)」と素直に従う私のように思える。信仰の歩みとは、このような右往左往。あっちへゆれ動き、こっちへゆり戻し、幾度も悔い改め、幾度も立ち上がる。これが私たちの偽らざる姿ではないのか。

「イエス」という名はヘブライ語で「神は救い」という謂(マタイ 1:21)。だから「イエスよ」とは、単に名を呼んだのではなく、神の子が十字架にかかる事実を目の当たりにして、そこに「神の救い」を認めたのだ。悪態を抑えきれないほどの絶望の淵で、自分の罪を神が負われる真実に出会った。「この方は何も悪いことをしていない(ルカ 23:41)」のに、傍らで私の罪を負って下さる姿をまざまざと見た。

「彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった(イザヤ 53:5a)」。私たちも十字架を負い(ルカ 9:23)、このキリストと出会う。イエスは虫の息で言った。「はっきり言うておくが(アーメン)、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる(23:43)」。まさに預言者が語った通りであった。「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、私たちは癒された(イザヤ 53:5b)」。キリストがおられるその場、その時が樂園。

キリストが共におられる時、とはいつか。「アーメン、あなたは今日わたしと一緒に(ルカ 23:43)」だ。「今日(semester)」とは含蓄のある時制で、イエスは度々「神の時」として語った(4:21,19:9)。日常の実感では心もとない「今日」であっても、永遠なる神の時と結びついた「今日」。「今日わたしと一緒に樂園にいる」とは、罪ある私たちが、その身のまま今、永遠に踏み込んでいる、という意味。限りある時や死もまた十字架につけられ、解き放たれている。だから私たちは「今日」精一杯仕える。



#### 【おまけのひとこと】

今日 という不可思議 永遠イメージよりもずっと神秘に満ちている 次々にあふれいで 常に未知なる出来事の現われ 永遠とは静止した無限時間ではなく 尽きない今日のことでないのか